

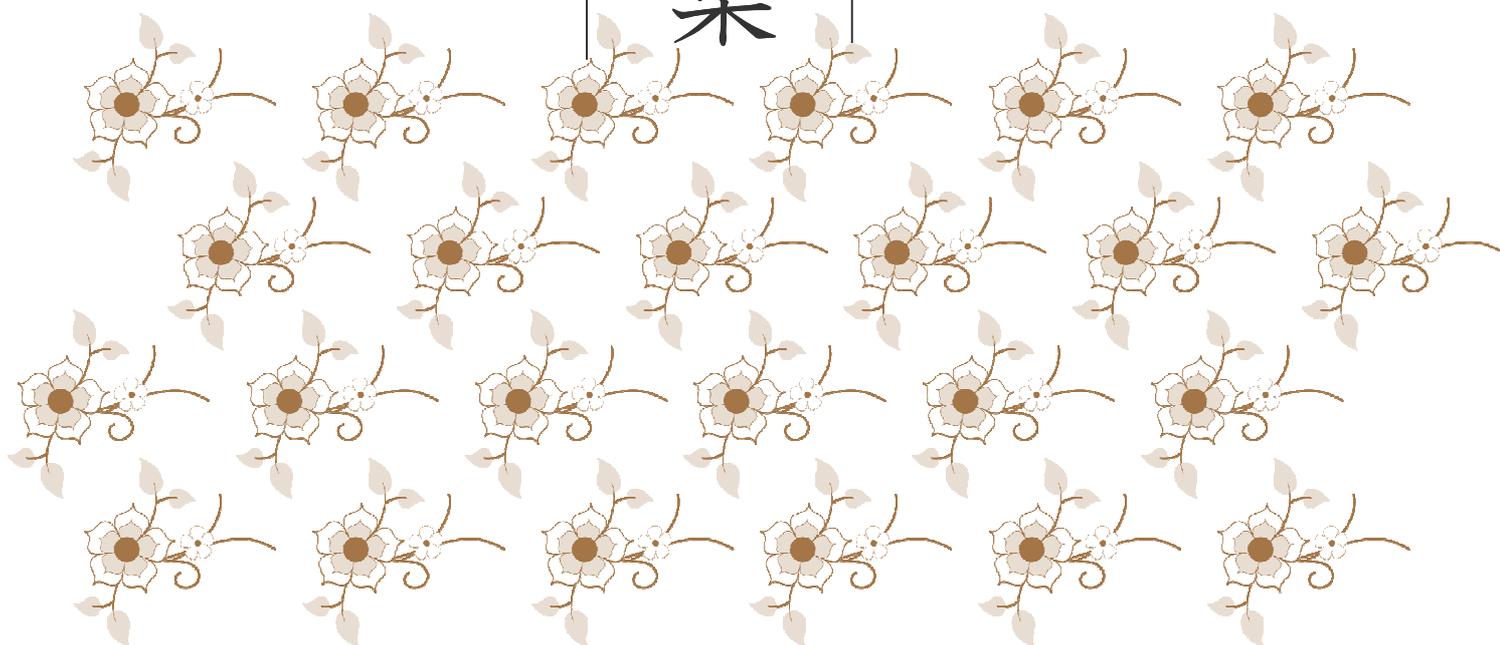


第3回

平成26年度

読書感想文作品集

読書感想文コンクール



目次

◆入賞作品

△ 最優秀賞

死後、あなたの記憶は誰かの記憶に残るだろうか？

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 杉浦 冨佳…………… 7

△ 優秀賞

理生くんが教えてくれたこと

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 富永 早紀…………… 8

サダコが私に教えてくれたこと

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 高木 志保…………… 9

◆応募作品

モリー先生から学んだこと

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 中村 紗英…………… 11

子どもたちに伝えたい。くきみはいい子。

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 大西 菜津子…………… 12

時間

短期大学部 保育学科 二年 橘 深香子…………… 13

本当の個人主義とは

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 渡邊 真美…………… 14

人って何だろう

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 酒井 杏華…………… 15

前世を一緒に解き明かす

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 四年 西川 知美…………… 16

聞く力

みんなの台所。

家政学部 生活環境学科 一年 永井 里歩……………17

「失敗」と書いて、「経験」と読む

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 村松 裕子……………18

苦しんでいるのは誰？

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 一年 坂尾 佑衣……………19

いつもと違う虐待を見る視点

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 一年 青木 萌子……………20

主人公の力

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 一年 稲垣 梨沙……………21

いい子について考えたこと

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 佐藤 珠子……………22

「いのちって何だろう」

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 森 美貴……………23

「仲間って大切」

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 佐分 三津江……………24

「人間」として生きるということ

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 下田 杏純……………25

生きるという大切さ

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 溝口 好日……………26

子どもの心に寄り添う

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 一年 山本 有菜……………27

「そうじの神様」から考えさせられたこと

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 一年 村瀬 友里……………28

家政学部 家政経済学科 三年 竹内 佑希……………29

| | | |
|---------------|-----------------------------|----|
| 人間という生き物 | 文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 宮崎 絵梨奈 | 30 |
| 愛の力 | 文学部 児童教育学科児童教育専攻 一年 岩間 みすず | 31 |
| ドームの中か外か | 短期大学部 保育学科 二年 川本 莉映 | 32 |
| 身近にできるエコ行動 | 家政学部 家政経済学科 一年 市川 和子 | 33 |
| 女性の品格 | 家政学部 家政経済学科 二年 山田 穂乃美 | 34 |
| 赤毛のアン | 家政学部 家政経済学科 二年 西垂水 法子 | 35 |
| 大切ないのち | 文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 今井 優里 | 36 |
| いのちをいただくということ | 文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 一年 高瀬 夏紀 | 37 |
| 学校の社会 | 文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 塩澤 まりな | 38 |
| ペンギンと夢 | 文学部 児童教育学科児童教育学専攻 四年 田村 静香 | 39 |
| 「女の強さ」 | 家政学部 生活環境学科 一年 笹木 瑞穂 | 40 |

入
賞
作
品



最優秀賞

死後、あなたの記憶は誰かの記憶に残るだろうか？

あした死ぬかもよ？〜人生最後の日笑って死ぬる 27 の質問〜 ひすいこたろう著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 杉浦 冨佳

この世に生まれた以上、人間を代表とする動植物には必ず「死」というものがやってくる。それは、どれだけ恐れてもどれだけ後悔しても直面する事実だ。決して避けることは出来ない。この本を手取る前の私は、もちろん明日死ぬかもしれないと思いつながら生活したことはなかった。しかし、命は永遠ではない。日本人の平均寿命は八十歳を超えているが、それはあくまでも平均で、明日生きている保証はない。そういう危機感もちながら日々生活することで後悔のない人生を送れると知った。

では、今日が人生最後の日だとすれば私は一体何をやるだろうか。自分に問いかけてみる。私はやり残していることが次から次へと思いつかぶ。その中には十年後、二十年後にしか挑戦できないものもある。しかし、今出来ることは何だろうかと考えてみると、人に感謝することではないかと思つた。私が今までの人生で嬉しく楽しい時や辛く悲しい時、どんな時にも周りには友達、家族がいた。人は何をやるにしても一人では出来ない。私は数えきれないほどの友達がいる。しかし、友達も他人のため、もちろん嫌な部分も見える。時には対立するときもある。しかし、それは自分を強くしてくれるなどと思う。両親も同様に、きつい言葉を投げかけられたとしても、それは両親からの愛情であるはずだ。私が今ここに生きているのは両親のお陰だ。両親がいなければ、私は今現在もこの世に存在していませんと思つたとぞっとする。今日という一日が何不自由なく暮らしているのは両親が働いてくれているからである。だから、大切な友達や家族には真っ先に感謝したい。

死後あなたの記憶は誰の記憶に残るだろうか。」という質問をこの本の中で見つけた。私はとても考えさせられると同時に少しでも誰かの記憶に残る生き方があるかと思つた。記憶に残るといっても、よく怒っていた人やよく元気のなかった人というマイナスなイメージではなく、プラスのイメージを持つてもらいたい。そうするためには、私は一人でも多くの人と笑い合うことを目標に人生最後の日を過ごすと思う。笑うことで人は元気が出るからだ。どんなに辛いことがあっても笑うことはとても大事だと思う。どんな状況でもいいから私は一人でも多くの人と笑って元気になりたい。そして、辛く悲しそうに人に元気になつてもらいたいと考えた。たった二十四時間しかない一日を笑顔で過ごすか過ごさないかでは大きくその日の幸福感や満足感は違つてくると思う。一度しかない人生の最後の日は笑顔で過ごしたい。

私は、この本を通じて今生きていくことがどれだけ素晴らしいことを再確認できた。また、今私の周りにいてくれる人をもっと大切にしようと思つた。この世に私という人間が生まれてきた奇跡。何不自由なく今日という一日を生きている奇跡を実感し、この一日がいかに可能性にあふれ、ありがたいことかを実感することが出来て良かった。



優秀賞

理生くんが教えてくれたこと

自分をえらんで生まれてきたよ」

いんやくりお著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 富永 早紀

赤ちゃんが生まれてくる前の事は、なぞに包まれている。赤ちゃんは話すことができないし、大きくなったら忘れてしまうものだと思っていた。しかし、理生くんは違った。生まれる前のこと、お母さんを選んでお腹に入ったこと、神様のこと、生まれた時のこと。たくさんのことを鮮明に覚えていて、それを私たちに教えてくれる。生まれる前の記憶など全く残っていない私にとって「胎児記憶」は、とても興味深かった。

赤ちゃんは、みんなを幸せにするために生まれてくる。そして、強い意思を持っている。どんな家に生まれるのか、どんな病気を持って生まれるのか。自分で決めて生まれてくる。これは理生くんが教えてくれたことだ。

赤ちゃんに意思があるというのには、とても驚かされた。私も意志を持って、自分で母親を選んできたのかなという気持ちと、本当にそうなのだろうかという疑い気持ちがある。不思議な感覚に襲われるのである。

あたりまえに生きていること。でも理生くんにとっては、そうではない。神様からもらった命と心を持っているからこそ、生きられる。生きていくというのは、大きな奇跡である。そう考えると、自分が今生きていくことに誇りを持つような気がする。生きていければ、良いことも悪いこともある。劣等感を抱いたり、落ち込むこともある。でも、「空いている」ということ、それ自体が奇跡なんだ、ありがたいことなんだと思うと心がとても楽になる。

また、悲しいことがあった時は理生くんの言葉を思い出したい。悲しめるといふのは、幸せなこと。悲しい時を乗り越えれば前よりもっとハッピーになれる。なんとポジティブな考え方だろう。そして、納得できる。

たった八歳でこう語った理生くんは、やはり生まれる前にも心のお勉強をしてきた特別な子であるのだと確信した。病気を選んで生まれてきた理生くんの言葉には本当に勇気づけられる。前向きな気持ちになれる。

又は幸せを贈り合うために生きていく」という言葉があった。私はできているかなと少し不安になった。今まで、こんな考え方をしたことがなかったのだ。私は友達や家族に幸せを贈れているかな、もし贈れていないのなら、今から贈っていきこう。そんな気持ちになった。

私は理生くんに幸せを贈ってもらった。たくさん言葉に励まされ、生きること、今まで以上に幸せを感じられるようになった。私もたくさんの人に幸せを贈りたい。多くのことを気づかせてくれた理生くんには感謝の気持ちでいっぱいだ。

理生くん、ありがとう。



優秀賞

サダコが私に教えてくれたこと

折り鶴の子どもたち：原爆症とたたかった佐々木禎子と級友たち」 那須正幹著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 高木 志保

『佐々木禎子』日本人なら誰でも耳にしたことのある名前だろう。彼女は広島で被爆し、放射能による白血病でわずか十二年の短い生涯をとした。しかし平和を心から願う彼女の気持ちは今もなお日本人の心に受け継がれ、禎子さんは平和への祈りの象徴となった。

彼女は白血病に侵された体で、学校に行けない寂しさや死に対する恐怖を「鶴を千羽折ると病気が治る」と信じ、乗り越えていたそう。高熱と激しい頭痛に苦しみながらも笑顔を絶やさなかったという彼女に、心を打たれた。私が彼女と同じ立場に立たされたら、苦痛に耐えきれず生きる気を失うだろう。

中学校の修学旅行で広島の実験資料館に行った。そこには禎子さんの折り鶴があった。小さな折り鶴は少しの力で壊れてしまっただったが、どこか凛としていて、私には彼女の分身であるかのように見えた。彼女の「空きたい」という強い強い思いが感じられ、涙が出た。原子力を利用して兵器を作るなど、人間は冷酷で恐ろしい。しかし人間が作り出したものを解決するのもまた人間なのである。

二〇一一年三月十一日、私たち日本人は戦後最悪の危機に直面した。マグニチュード九・〇の大地震と津波、そして原子力発電所での爆発。放射能による汚染はとどまることを知らず、全国に広がった。私はチェルノブイリなどの原発事故は本の中でしか知らなかったもので、その威力に驚き、恐怖を感じた。

世界唯一の被爆国である日本は原子力がいかに危険で制御しがたく、一つ間違えば手がつけられないことになるかと思っていたはずなのに、何故このような事態に陥ったのか。

戦後、日本は高度経済成長で急速に発展し、モノを作り海外へ輸出することで先進国と呼ばれるようになった。その中で電気は必要不可欠である。狭く限られた国土で大きなエネルギーを小さな力で作り出すことができる原子力発電は日本にとって魅力的だったのかもしれない。しかし、禎子さんをはじめ、原子力によって命を落とされた方々今もなお後遺症で苦しめられている方々の目に原発事故はどのようなように映っただろう。原子力の恐ろしさを忘れ、核や原子力の根絶を訴えてきた人々の思いを無にしているのではないだろうか。物質的に豊かな生活を追求するあまり、尊い犠牲者によって得た教訓を忘れてしまった。人の安全や生命こそが一番大切であったのに。人は、それをなくして本当の幸せを手に入れることはできないのだ。

東日本大震災では多くの人命が失われ、日本にとっては不幸な出来事だった。今が、その過ちを正し、生活を見直す転機なのかもしれない。禎子さんが私にそれを教えてくれたのである。

応募作品



モリー先生から学んだこと

モリー先生との火曜日」 ミッチ・アルボム著、別宮貞徳訳

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 中村 紗英

自分がある日突然、病気になってしまったらどうするだろうか。そんな事を考えながら本を読んだ。モリー先生は難病の筋萎縮性側索硬化症ALSというものがある日突然かかってしまった。テレビ局に自分ことを報道してもらい、国の人達に病気について知ってもらっている時、生徒のミッチが現れた。昔とは変わってしまい、弱っているモリーを見て、驚くミッチだったが、そこから二人は、最後の授業を始める。

最後の授業は、読んでいるとどれもとても深い話だった。死について「健康について」かねについて。モリーはミッチに話をする事で、自分の生きてきた証、自分の人生について振り返っていたのではないかと私は思った。モリー先生は、冗談を言いつつも、大切なことや忘れていたことを一つ一つ教えてくれたり、思い出させてくれたのだと感じた。私は、今までにこんなことを教えてくれる先生に出会ったことはない。だから、この本を読んでみるとミッチがとても羨ましく思えた。

自分がもし、モリーの立場だったら、モリーと同じようなことができるだろうか。」と考えてみた時に、私はまず無理だと思った。いつどうなるかも分からず、不安にさらされながら生きていくことは、相手にこのような話をする心の余裕などまずないと思う。逆に、ミッチの立場だったらどうするか。」モリー先生のように難しい病気になってしまった人を笑顔にできるか。」と考えると、お互いの信頼関係が大切だと思った。信頼しているからこそ、二人とも火曜日がとても好きだったと思う。中でも、モリー先生がミッチに言った「又に与えることで自分が元氣になれる」いう所がとても心にしみた。モリー先生は、ミッチという素敵な生徒に恵まれ、モリーもミッチという素敵な先生に恵まれたと思う。

人には限られた時間があり、それをどう生きていくかは自分次第である。私は、モリー先生のように、自分の人生について、人に胸をはって話せるような人間になりたい。そのためには、常に感謝の気持ちを持ち、自分が相手にされてうれしかったことを、しっかりとあげたい。また、モリー先生は、「ほやばやとあきらめるな。いつまでもしがみつくな。」という言葉が印象的だった。私は、この本を読む前、すぐにあきらめてしまい、まあ、いいか。」と思うことが多かった。頑張るってやり続けるといことが少ないように思えた。なので、これからはすぐにあきらめないで、何度も失敗してもあきらめずに成功するまで続けたいと思う。そして、ただやるのではなく、どうして失敗したのか」をしっかりと考えて続けたい。この本を読んで自分の甘さというのも実感したので、出会えてよかったと思う。



子どもたちに伝えたい。くきみはいい子。く

きみはいい子」 中脇初枝著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 大西 菜津子

十七時まで帰ってくるなど言われ校庭で待つ児童とその彼を見つめる新任教師。娘に手を上げてしまう母親とママ友。この本は多くの話が書かれています。その中で一番私を感じたことは、自分はこうして今ここでこの世の中に生まれてきたんだろう。神様はどのような使命を私たち一人一人に伝え、必ず人間は一人で自由に生まれることができない。どうしてこの両親の子どもとして生を受けることができたんだろう。学級崩壊、虐待、ネグレクト、世の中には誰かによってこのような多くの問題が起きてしまいました。

17 の最後の文章である、ぼくはこぶしをにぎりしめ、思い切り扉をたたいた。私はこの文章を読んで思いました。誰かが起こした問題であるから、誰かがその問題を解決していけばいい。あまりにも簡単な問題でみんながじゃあどのようにしたら問題をなくすことができるの？と問いかけてくるかもしれない。私はこの世の人間が今自分のしている行動一つ一つを胸に手をあて目をつぶって考える時間をとり、頭と心で自分と向き合うことが大切であると思います。すぐに多くの問題が解決することはできないが、少しずつならできる。きみはいい子っていう書名は、みんな、子どものころは必ず一人一回は誰かに伝えてもらった言葉であると思います。上手にできたね。いい子だね。」さごいね。いい子いい子。」など、ほめてもらったときに使われるのが「いい子」という言葉。でも、他の子どもたちを見つめて考えてみると、親に先生にほめられたことがない、誰にもほめられずに大人になり上手くほめることができず自分の子どもをほめることができない、そしてその子どももほめることができないという状態に陥っていると考えました。

だから私たちが先生になったら子どもたちを一日一つは必ずほめるなど目標を持って関わっていききたいです。



時間

モモ ミヒヤエル・エンデ著、大島かおり訳

短期大学部 保育学科 二年 橘 深香子

「時間」とは何だろう。

私はこの本を読んで、そのことを深く考えさせられました。時間は確かに大切です。けれど、ぎりぎりまで時間を節約して得られたものは何だったのでしょうか。生活は痩せ細りました。大人は誰も子どもにかまわなくなってしまいました。保育学科で、大人と子どもの愛着関係の大切さについて学んできた私としては、それがいかに恐ろしいことかがよく分かります。

モモの友達みんな素敵です。中でも親友の道路掃除夫ベップと観光ガイドのジジはとても親切です。モモのことを大切に思い、楽しいお話をしてくれたり、モモにアルファベットの書き方を教えてくれたりします。しかしその二人も、時間の節約に没頭する世界に巻き込まれてゆくのです。二人の親友に限らず、モモの他の友達も、時間の節約によって人が変わり、モモとろくにお喋りも出来ないようになります。友達と一緒にゆっくりお喋りする時間は、誰もが大切にしている時間ではないのでしょうか。私自身、友達とお喋りする時間は、かけがえのないものです。楽しくて、これからも頑張ろう！」と力が漲る糧でもあります。モモもきっと、友達とのかけがえのない時間を取り戻すため、灰色の男たちに立ち向かったのだと思います。モモはみんながおかしくなったのは灰色の男たちの仕業だと誰よりも早く気づき、立ち向かった勇者です。モモのお陰でみんなの時間を取り戻すことが出来ました。

モモは聞き上手で、みんなはモモに話せば話す程、想像力が広がり、楽しくお話が出来るようになります。モモは本当に魅力的な女の子です。私もモモに話を聞いて貰ったら、自分の世界が開ける気がします。私の住む世界にモモはいないけれど、口下手な私の話を聞いてくれる人達は沢山います。時間の節約は勿論必要なことでもあります。だからだとしてばかりでもいけません。しかし、温かく触れ合う心の余裕は、大人にも、そしてこれから大きく成長してゆく子どもたちにとっても、とても大切なものなのです。

一見無駄に見えてしまう何気ない日常の中にある、思い遣りや、優しさ、勇気、希望……そんな一つ一つの宝物のような「時間」を大切に、慈しみながら、日々を過ごしていきたいと思えます。



本当の個人主義とは

『こゝろ』 夏目漱石著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 渡邊 真美

近年、本来は相手の気持ちを尊重することで成り立っている個人主義の価値観が崩壊して、自分の生きがいや権利ばかりを主張する自己中心的な日本人が、世の中が増えて来てはいないだろうか。

これは決して今の若い世代にだけ向けて投げかけた問いでは無く、大人たちにも言えることであると思う。最近によく権利を先に言って、義務をあまりいわない大人が増えたと思う。このような利己主義、自己中心主義の大人が増え、強い者や声の大きい者、多数者の傲慢、欲望というものが優先され、いつも子供達の弱い声は遠回しにされてしまっている。その上、何か不愉快なことがあると、その理由を自分以外の他者に、教育に、社会に政治に求める感情をふくらませて、日本人全体が自己中心的な人間性になって来たということは紛れもない事実である。

このような人間の利己主義つまり、エゴイズムについて、私は改めて夏目漱石の作品である『こゝろ』から考えてみることにした。元々この作品は彼が明治四十三年の修善寺の大患で一時的な「死」を経験したことが人間観、死生観に大きな影響を与えたことで彼が晩年に書き上げた物である。そのため暗く重い作品であるが、人間のエゴイズムについて詳細に描かれた作品でもある。

この作品の『先生と遺書』の中では、両親をはやくに失った先生は信用していた叔父に財産を横領され深い人間不信に陥り故郷を捨てたが、下宿先の温かい雰囲気人間性を取り戻したと書かれている。しかし下宿先のお嬢さんに恋をしてしまい告白しようと躊躇していると、親友のKにお嬢さんへの気持ちを聞かされエゴイズムを働かせてしまうとも書かれていた。

客観的に見れば、悲しい結末の物語になってしまふけれど、この物語から私達は幾つか学ぶべき事があると私は思う。

まず一つ目は、どれだけ正義感が強く立派な人間でもやはり、人間は絶対にエゴイズムを持っているということである。そして二つ目は、利己主義は他人を傷つけ人間関係を壊すということである。そして三つ目は、この物語のような悲劇を起こさないように私達は、より良い人間関係を作り上げなければならないことである。

以上の事柄から、私達はこの物語から教訓を貰えたのでは無いだろうか。いくら虚構とは雖も、人間は誰も利己的な意識を持っていることは事実であると思う。しかし一番大切な事は、自分の意見と相手の意見を尊重していくこと、つまり片方の利己意識を一方的に押しつけるのは無く、双方の個人主義を認め合う人間関係を築いて行くことだと私は思う。

私達の生まれるずっと前の時代、明治の時代を生きた偉人は、人間のエゴイズムについて警鐘を鳴らし私達に作品を残した。私達は平成の時代をどう生きて行くべきだろうか。



人って何だろう

蜘蛛の糸」 芥川龍之介著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 酒井 杏華

この本は、「悪い人ってどんな人だろう」ということを考えさせられる本です。

私の中の悪い人は、人のことを考えずに自分の好きなように行動してしまう、すぐに他人に暴力をふるってしまう、人の悪口を言う、など、これらのことが全て当てはまる人だと考えていました。そして、こんなに悪い人だから、当然優しい部分は何一つないだろうと考えていました。

多くの人はそうだと思いますが、私は、悪い人は好きではありません。私には嫌いな人はあまりいないのですが、私が中学生のころに嫌いだっただ友達がいました。その友達は、自分にとって都合の良いように友達を使ったり、他人の弱点を見つけ、悪口を言いふらしたりする人でした。でも、今になって考えてみると、その友達は、自分の好きなことである、バスケットボールや陸上、習字などに対しては、すごく真剣に取り組んでいてかっこよかったことを思い出しました。また、人間関係でも、仲の良い友達のことはすごく気にかけていて、優しくできる人でした。その優しさを、周りのみんなにも見せることができたら、少しは周りからの印象が変わっていたと思います。

今挙げたことは、私の体験談ですが、この本の主人公も、この、私が中学生のころの友達と似たようなところがあると感じました。それは、どんなに悪い人にも必ず良いところがあるということです。普段、いばっていたり、友達とけんかばかりしている人も同じです。人には絶対の良いところがあります。でも、その良さを外に出すのが苦手な子どもがいます。なので、周りの大人は、その子の良さに気づき、それを本人に伝えることで子どもたちに自信を持たせてあげることが大切だと思います。本当にそれができれば、もっと良いことをしよう!と思う子どもが増えるはずですよ。

私は、「この人は恐そうだな。」とか、「この人はおとなしそうだな。」などと外見で人を判断してしまうことがあります。しかし、人の性格はそんなに簡単に分かるものではないということに気づいた今、これからは見た目だけで他人を判断するのではなく、「この人の内面が見たいな、良いところを探したいな」という気持ちで人と交流してみようと思いました。

将来、人に何かを教えるという立場になる人にとっては、様々なことを考えさせられる本だと思います。



前世を一緒に解き明かす

不ノセントブルー― 記憶の旅人― 神永学著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 四年 西川 知美

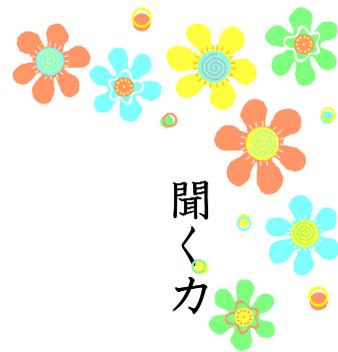
人が読みたいと思える本は、何で決まるのだろうか。それは、序章で大きな影響を与える。私は、序章の中の一文に、次のページを開いてみたいという気持ちにさせられた。その一文とは、それは、誰に対する謝罪の言葉だったのか、男は、その答えを見つけることができなかった。」である。

この物語は、解き明かすようなミステリーチックな展開と中心にある大きなテーマである前世が読み手の探究心をくすぐる内容である。読みやすいところは、前世の内容の字形が違うことで、ここから前世なのだという区別ができるところである。

また、登場人物が多く出てくるので、どの登場人物を追いかけていくのかもおもしろい。それぞれの人物の前世が折り重なるように出てくるので、どうやっていくのだろうかとうまくわくさせられた。そして、また次のページをめくりたくなくなるのである。主人公の謎の多いところや彼のさがす人物と一緒にさがしたり、彼の前世は何者だったのか考えたりすることができる。私も最後の彼の前世について知った時は、やうだったのか。」ともう一度序章を読み返して納得させられた。

一人一人の前世に意味があり、現在と重なる点や もっと生きたかった。」という命をテーマにした感動する話である。そして、読んでいる私自身も、自分の前世ってどんなのだろう。今いる現在の中でも、前世での絆でつながっているのかな。と考えてみたくなる。

イノセントブルーは、前世の記憶を旅する中で、今生きている意味や命、愛などをとても身近に感じることでできる物語である。私の好きな序章の一文の答えもこの物語の中から自分で探していくこともおもしろく感じる。いろいろな時代に翻弄されながらめぐり合った今世の出会いを大切に生きていこうという気持ちになるだろう。前世を一緒に解き明かしながらこの本を読んでほしい。



聞く力

聞く力 心をひらく 35 のヒント」 阿川佐和子著

家政学部 生活環境学科 一年 永井 里歩

この作品は、一昨年の年間ベストセラー第一位であり、作者がテレビでもおなじみの阿川佐和子さんということもあって選んでみた。雑誌の対談を二十年も続けていらっしやるのに、未だにインタビュアー前はビクビク緊張するそうだ。テレビで見る限り、そんな様子は少しも感じないし、年配の偉い方に対しても堂々と質問しているように見える。

阿川さんには、相手が「この人に語りたい」という魅力があるのだと思う。

質問は「一っだけ用意しなさい」

もし一っしか質問を用意していなかったら、次の質問のヒントは、一っ目の質問の答えの中に隠れている。そうなれば、質問者は相手の話を本気で聞かざるを得ない。

いくつも質問を事前に用意していても、質問のタイミングや、話が質問の答えから離れてしまった時などに質問者は混乱してしまうし、質問することばかりに気をとられ、相手の話を聞きそびれてしまうのだ。

「下クは生もの」

だから予定通りにはいかないものだ。こちらから質問しても答えたくないことだってあるし、相手もどうしても話したいこともある。話しているうちに忘れかけていたエピソードが出てくることもある。聞き手は語り手のさりげない手助けをすればいい。

思いもよらないエピソードが聞ければ、自分も満足するし、意外な掘り出し物を当てたという楽しみもある。

先入観にとらわれないことも重要なことの一っだと思う。「この人は、世間でどんな人間と思われるか」

他人が作った「イメージ」は、その人のほんの一部でしかない。話していくうちに意外な一面を発見することがある。無口だと思っていたら、意外とおしゃべりだったり、無愛想に答えていたけれど、本当は楽しかったり：だからおそろしくこういう人だろうと当たりをつけず、「意外性」を見つけてみるのも重要である。

「質問の柱は三本」

質問する相手の資料や作品、その人の来し方や考え方、人生の転換期や人間関係などを調べ、大ざっぱな疑問を抱き、三つのテーマに絞りインタビューする。しかしそればかりにとらわれず、会話に集中し、あなたの話を私はしっかり聞いていますよ。という態度で臨み、誠意を示すことが基本であり、聞き上手なインタビュアーなのだと思う。



みんなの台所。

キッチン」 吉本ばなな著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 村松 裕子

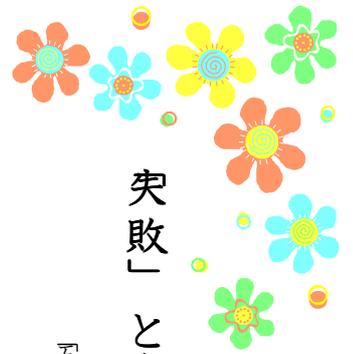
中学の頃に一度読んだことのあるこの本を大学生になってから読んでみると、始めはどんな内容の話かピンとこなかった。しかし、読んでいくうちに思い出してきた、あつという間に読み終えてしまった。何回読んでも心にくるいい小説だと思った。

二つの話が入っているが、どちらも“死”というテーマで書かれている。“死”とは思いいテーマの話になってしまいがちなはずなのに、この本はどちらの話も読み終えた後なぜか心が穏やかになる気持ちの良い本だった。

一つ目の話は、家族という一番身近な人の死と向き合う。家族が死んでしまった者同士、わかり合えることはたくさんあるだろうし、一番その人の気持ちをおわることができると思う。だからこそ一緒にいることは他の人と比べたら心地よく、その人がいるだけで孤独という寂しさから抜けさせるのかもしれない。しかし、人を落ちつかせることができるのは人だけではない。この物語のみかげにとってそれはキッチンだったのだ。それは一つではないし、これからも増えていくと思うと、少し未来に希望が、楽しみがもてるのかもしれないと思った。また私はえりさんの心の大きさに心を打たれた。男だけど息子を死んだ妻の代わりに女になり育ててきた人生は、多くの壁があったはずだ。だからこそえりさんは思いつきで生きてこれたのかもしれないと思った。思いつきの人生もえりさんの生き方をみてたら悪くないと思えた。

二つ目は一つ目と違って、恋人という他人の死と向き合う話だ。他人と言ってしまうとすごく悲しいが、それでもその恋人という他人は自分にとって家族と同じくらい大きな存在だと思う。この話の中で、風邪よりつらいものはない、風邪のつらさがまたくると思うと嫌になるけど、こんなもんかっと思えばつらくならないというニュアンスの会話があって、わたしはこれは確かにと思ったし、自分の今つらいと思っただけのものでもない、ちっげけに思えた。この会話以上に私が心に残ったのは、別れも死もつらい。でもそれが最後と思えない程度の恋なんて、女にはひまつぶしにもならない」というセリフだ。この場面を読んだ瞬間ものすごく共感した。別れはつらかったけれど、今思えば良かったと思える恋だったし、その時間はとても充実していた。という実体験も思い出せた。

この小説はぜひみんなに読んでもらいたい。



失敗」と書いて、経験」と読む

五体不満足」 乙武洋匡著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 坂尾 佑衣

失敗」と書いて、経験」と読む。この本のあるページにこの言葉が書かれていた。この本を読んで、この言葉に出会い、著者である乙武洋匡さんを表す言葉としてびったりだと感じ、また、とても大切な言葉だと思った。乙武さんには生まれつき手と足がない。先天性四肢切断という障害があり、移動の際には電動車椅子を使用している。普通の生活を送ることさえ、大変なものではないかと思ったが、この本には乙武さんの強さが描かれている。乙武さんは、障害を理由に甘えたり、人に頼ったり、諦めたりすることなく、様々なことに挑戦してきた。特別支援学校ではなく、普通の公立小学校へ入学、中学ではバスケット部に所属し、試合にも出場した。高校ではアメリカンフットボール部に所属し、マネージャーとして選手と共に熱く戦った。大学ではサークルに入り、イベントの中心人物として活躍した。乙武さんは他にもたくさんの方に挑戦し、その中で多くの出会いもあった。失敗」と書いて、経験」と読む。この言葉もサークルのイベントに参加した際、早稲田商店会会長の安井さんが言ったものである。この言葉に対する乙武さんの感想はあまり書かれていなかったが、とてもいい言葉だと思った。失敗することは決して悪いことではなく、失敗したことを次に活かせるよう考え、それを経験とし、糧にしていけば良いのだ。乙武さんも、様々な失敗をし、その度に人一倍努力を重ね、本当に様々なことに挑戦し続けてきた。私も何かに挑戦したい、諦めずに頑張れるなにかを見つけたと思うとともに、学生のうちにたくさん失敗をし、経験を積んでいきたいと思った。たくさん失敗を通して、多くのことを学び、目の前に立つ壁を壊していけるような強さを得られ、人生も豊かになっていくのだと思う。

この本を読んで、一番驚いたことは、乙武さんがこの本を出版したのは大学生の頃で、記載されている様々な活動も大学時代のことであるということである。乙武さんは授業の合間を縫って講演会に参加し、多くの人の前で演説を行っていた。今の自分に乙武さんと同じことが出来るかという、当然出来ないと思う。乙武さんは、障害というハンデをハンデとせず、本当に実りの多い人生を送っていたのだと分かる。私も、乙武さんのように強い心を持ち、失敗を恐れず、様々なことを経験していきたい。



苦しんでいるのは誰？

きみはいい子」 中脇初枝著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 一年 青木 萌子

虐待をした、された、幸せになる人なんていない。痛い、辛い、悲しい。

この本にはそんな虐待をテーマに五つの話がかかっている。

大学新卒の小学校教員からみた虐待 インタの来ない家」

公園で子どもを遊ばせるママたちの裏の世界 べっぴんさん」

地域で自営業を営む父親 ちろつき」

独り暮らしの老女は気づいた ごんにちは、さようなら」

認知症の母親を預かる娘の過去と現在 うばすて山」

それぞれの立場から見た虐待は、私に様々な印象を与える。虐待をされた側のことは、よくニュースでも耳にするし、新聞や教科書でも取り上げられている。虐待をしてしまう、する側のことを考えたことがなかった。

虐待をする側はどうなのだろうか。どうしてしてしまうのだろうか。今回この本に出会って虐待をしてしまう側の気持ちに出会った。

本の中では、以前に自分が虐待を受けていたケースから発展することが多かった。ちょっとしたきっかけがストレスになって、それを発散したいためだけに暴力をふるってしまう。

子どもに…。普段は笑顔で人に接していても、その顔には「笑顔」というマスクを被っているだけだ。人にみえないところで気づかれないように。子どもは鮮明に覚えている。記憶として一生刻まれる。こんなに苦しい思いをしながら生きていくなら、死んだほうがましだと考えてしまうかもしれない。

虐待をした側には共通点があった。自分を一人の人間として認めてほしい。だれかに大切な存在だと気づいてほしい。」このことがどの人にも理解してもらえないと、虐待がなくなることはないだろう。

もし保育者として保育の場に立ったとき、自分は解決へと導くことができるのだろうか。これからいつかは出会う問題なのだろう。その人の良い所、悪い所、すべてをみつけて受け入れることのできる人間になっておくべきだ。虐待とどう向きあっていくべきかこれからも考え続けていきたい。



いつもと違う虐待を見る視点

きみはいい子」 中脇初枝著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 一年 稲垣 梨沙

この本を読もうと思ったきっかけは、虐待の現状をより深く知って、世の中の出来事として受け止めなくてはいけないと思ったからである。

五つの話が盛り込まれている短編集であり、この話は虐待を題材としたもので、虐待される側ではなく、虐待をする側に視点をおいて書かれている作品であった。このような視点での作品を読むのは初めてであり、いつもの虐待について思う気持ちとは少し違うものがあった。どの話でも毎回、この家族は、この後どのように過ごすのだろうと想像させられるものだった。育児放棄されている子どもの話、自分の子に対してイライラして叩いてしまう母親目線での話、子どもの友達が虐待をうけている話、孤独な老人と障害をもつ子どもの話、自分を虐待した母を介護する話の五つであり、虐待を話に絡めた物語になっている。

私は両親に、自分の間違った行動や他人に迷惑かけてしまうことなど言葉を通して叱られることは多く経験したことはあったが、虐待の経験は一度もない。そして、両親が愛情を注いで育ててくれたことを実感し、感謝している。最近のニュースでも虐待により子どもが死亡するという事件など、よく耳にする。私たちが当たり前のよう感じてしまっている愛情も、一方では当たり前ではなく、愛情を注いでもらえない子もいるという胸がづらい気持ちになる。虐待するという行為は悪いことだと理解していても、する側の心の中には何かたくさん問題と葛藤していることがあるのかもしれないことを、読み進めていくうちに感じた。現在、核家族が増えていく影響で母親は子育てについて相談する相手がいないことで、一人で抱えこみ、そのストレスから虐待に繋がってしまう社会。でも、誰かが手を差し伸べることで救われたりする。このことは虐待される側にも言えると思う。周りの人たちの一言であったり、行動が一人でも多く助けられていたように、私は積極的に行動していきたい。周りの人たちの協力があったからこそ子育ては成り立つものだということを改めて感じた。

この本に限らず、もっと虐待についての記事であったり、ニュースを見たりと、より関心を持ち、虐待の現状を知り、受け止め、虐待を防ぐにはどうすればよいかを自分なりの答えを探したいと思った。



主人公の力

クライマーズ・ハイ 横山秀夫著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 佐藤 珠子

私はこの「クライマーズ・ハイ」という本を最初から最後までいっきに読むことができた。それなのに心にずしっとくるものがあった。読み終えた後は胸がいっぱいになった。

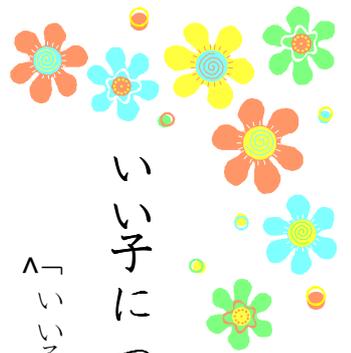
題名を見て単純に山に登る話なのかなと思った。しかし読んでみるとただ山に登るだけの話ではなく、新聞記者である主人公が大きな事件が起きたときのことを振り返りながら衝立岩という山に挑戦する話だった。この事件は一九八五年に実際に起きた墜落事故であり、さらに著者も当時新聞記者であったため作品にリアリティがあった。そのため新聞を作るシーンの緊迫した様子などひしひしと伝わってきた。

私がこの本を気に入った理由は他にもある。それは主人公だ。この本の主人公は人間関係がよくなく、家族とも上手くいっていない。そんな彼が墜落事故の全権デスクになり新聞を世に出していく。一分一秒が大きい世界で正確な情報を読者に届けるために主人公が悩み、苦しみながら大きな決断をする。新聞に対してひたむきな主人公に感情移入してしまったり、思わず応援したくなってしまったり。私はそんな風に思える主人公に今まで出会ったことがなかったので感動した。

私がこの本で一番心に響いたシーンは解説を書いている後藤正治さんと同じで、異動になる主人公が部下に、「どこへ行って日航デスクは悠さんですから」と言われる所だ。この後本文では、思わず落涙した。と続くが、気づけば私の目にも涙がたまっていた。

このように大きな事件や衝立岩に立ち向かう主人公と共に自分もまるでそこにいて、人生の岐路に立たされているかのように感じさせるこの本を私はたくさんの人に薦めたい。

また、それと共に私もこの本の奥深さをより知るために一度だけでなく二度、三度読み返し、一度目では気が付かなかった著者の意図や、主人公、また主人公に関わるすべての人の気持ちについてなど新たな発見をしていきたい。



いい子について考えたこと

^「いい子」じゃなきゃいけないの？」 香山リカ著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 森 美貴

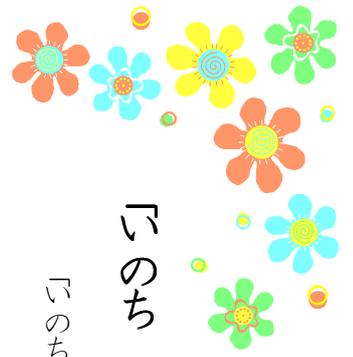
私がこの本を読もうと思ったきっかけは、教育についての本を探している時に、興味深い題名だったからだ。

そもそもいい子とは何か、どういう子どもがいい子なのかと考えながら読んだ。いい子は、現在と親の世代とでは異なっているようだ。そのため、いい子はその時代その時代で変化していくのだと思った。また、尾崎豊さんの曲を親の世代が子どもだった時に聴くと、共感をしていたそうだが、私の世代が聴くと共感せずに「どうしてそう思うのか」と疑問を持つようだ。私は共感することが出来ない。なぜならば、恵まれた環境であるのに、なぜそんなに今の現状から逃げたかったのだろうと思ったからだ。日本は、平和であり、教育を受けることができる為、恵まれた環境と考える。しかし、私が親の世代の人間だったら、共感していたと思う。その世代世代で感じ方が異なると思うからだ。

そして、時代によっていい子の特徴が異なると筆者は述べていたが、私も同じ考えだ。現在は、昔にはなかった携帯電話があったり、インターネットが普及したりと子どもの環境が異なっている。時代によって子どもの環境が異なると、子ども自体も変化すると私は考えるからだ。特徴を知るには、まず、その時代に流行している物や、生活環境、現状について知っておくことが必要だと考える。

また、子どもはいい子を演じているとも筆者は述べていた。本当のいい子になろうと頑張りすぎた子どもは後に、パンクしてしまい、反抗的になることがあるそうだ。このようなことにならないように、子どもがいい子を演じないようにするべきだと考える。自分が小学校の先生だったら、子ども一人一人を日々よく見て、ちょっとした表情の違いに気付きたい。そして、子どもの気持ちをいち早く知り、少しでも子どもの気持ちを理解したいと考える。子どもがいい子を演じず、子どもらしく生活が出来るようにしたい。

したがって、いい子を演じる子どもを減らすためには、早く子どもの現状や気持ちに気付く必要がある。そして、その子その子に応じた対応や対策をする必要があると考える。そして、子どもがいい子を演じず、ありのままの自分として生活できるようになるといいと思う。



「いのちって何だろう」

「いのちのリレー」 川久保美紀著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 佐分 三津江

「いのちって何だろう」

神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校の初代校長、大瀬敏昭さんは、末期がんで余命宣告を受けながらも、子どもたちにいのちの尊さを伝えようと、最期まで教壇に立ち続けました。自分の体を教材にして行ったので、「いのちの授業」と呼ばれるようになりました。

私はこの本を読み、大瀬校長先生を非常に教師として尊敬できる先生だと思いました。なぜなら、大瀬校長先生が末期がんの余命宣告を受けたとき、教師を辞めて、最期の時間を家族とゆっくり過ごす選択肢もあったと思うけれど、大瀬校長先生は、最期まで子どもたちに何かを残したい、教師としての生き様を見せたい、よりよい学校にしたいという強い信念を持って最期までいのちの授業を行ったからです。

また、「死」を教育の中に取り入れたことです。近年では、教育の中で「死」はタブー視される傾向があります。明るく元気に「をスローガンに掲げている学校も多いと思います。しかし、大瀬校長先生は 明るく元気じゃなくてもいい。弱くてもいい。子どもを認めてあげる、子どもが安心できる学校にしたい。」とおっしゃっていました。大瀬校長先生のこんなエピソードがあります。大瀬校長先生は三十九度の熱があるときでも出勤していました。そして、学校で子どもたちと話をしていると、熱が三十七度まで下がってしまう。本当の笑顔ができる、穏やかな気持ちになれる。というエピソードです。また、大瀬校長先生は、こんなこともおっしゃっていたそうです。学校に来ると痛みも苦しみもすべて忘れ、元気になる、子どもたちがエネルギーをくれる」と。それと同時に、私は子どもたちにとっても学校は、自然に笑顔がこぼれる場所だったと思います。そして、子どもたちにとって大瀬校長先生は太陽のような先生であったと思います。

「いのちって何だろう」

大瀬校長先生が、小学三年生のいのちの授業で問いかけた問いです。大人でも答えることが難しい問いです。しかし、大瀬校長先生が絵本を使い、子どもたちを導きながら、いのちには限りがあるということ。しかしつながっていること。そして、つながっているだけじゃなくて、命は永遠であり、心として命は永遠に残る。という答えに子どもたちは辿りつきました。私は、大瀬校長先生の授業は、子どもたちのその子なりの言葉で語らせることで、現実と向き合い、前向きに生きる力に変えていく授業だと思いました。



私の将来の夢は、小学校の先生になることです。私は、生まれてから今まで十五年間、学校へ通ってきました。私が生きてきて一番長く過ごした場所が学校といっても過言ではないでしょう。そして動機は単純に、学校が大好きな場所だからです。学校は、大好きな先生や友人に出逢えた場所であり、多くの想い出が詰まった場所だからです。私が小学校の先生になったら、大瀬校長先生のような自分のいのちをぶつけて子どもたちと向き合えるような先生になりたいです。また、大瀬校長先生は、教育の信頼は授業から生まれる。授業づくりが学校づくり。教師が変われば学校が変わる。」とおっしゃっていたそうです。だから、私も将来子どもたちをしっかりとした授業ができるように、これからの大学生活を学業に専念し、日々精進していききたいと思います。

仲間って大切」

「瞬の風になれ 第一部〜第三部」 佐藤多佳子著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 下田 杏純

やっぱり、仲間って大切。」これは、私がこの本を読んで一番強く感じたことです。みんなの気持ちをひとつにしてみんなで助け合えば、ひとりで頑張るより大きく成長できるとこの本は教えてくれました。

主人公の神谷新二は、サッカー一家に生まれ、幼い頃からサッカーをやっていますが、日本代表候補の兄憲一との実力の差に苦しみ、サッカーに対する情熱や希望が薄れていきます。そんなとき、幼馴染の連に おまえも走るの好きなんだな。ボールなんてなけりゃもっと早いのに。思いっきり走るの気持ちいいぞお。」と言われたのをきっかけに、サッカーを辞め、陸上をやることを決意します。私は、その部分を読んだとき、新二には陸上をやりたいという前向きな気持ちよりも、サッカーから離れたいという逃げの気持ちがあったように感じました。しかし、陸上部に入った新二が、連や部員たちと助け合い、刺激し合う中で成長していく姿には感動しました。

初めは、才能があるのに努力しない連が嫌いでした。そして、せっかくの才能を無駄にするのならその力を新二にあげることができたらいいの
と思っていました。でも、読み進めていくうちに、もしも新二が連の力を手に入れていたら才能をなくした連はもちろん、力を手に入れたはずの新二も成長することができなかつただろうと思いはじめました。新二が成長できたのは、自分の弱さやできないことから逃げずに、少しでも速くなるよう、少しでも連に追いつこうとしたからだと思っただけです。また、連が成長できたのも一生懸命努力する新二やチームメイトの姿や気持ちを感
じ、自



人間」として生きるということ

ホテルローヤル」 桜木紫乃著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 二年 溝口 好日

分の責任の重さを知ったからだと思います。だから、どちらが欠けてもいけない、お互いにとっても大切な存在なのだと思います。人が成長するた
めにはもちろん一人ひとりの努力も必要だと思います。でも、お互いを見て、考えて、支え合っていくことも大切だと思います。それは、新二と連
の二人だけでなく陸上部全員、さらに私たちにも言えることだと思います。そして、そんな仲間と走るリレーは勝ったものも、負けたものも一度
きりしかなく大切なもので、新二が 先生たちの頃からずっと繋がって、バトンが渡ってきている気がする。」と言っているように一つのレースを繋
ぐのは四人だけど、そのバトンには様々な人の重いのがのっていて、その思いを途切れさせないように大切に、今まで繋いできてくれた人への感
謝の気持ちをもって、全力を繋いでいかないといけないと思いました。それは、リレーだけでなく、他のスポーツや人生にも言えることだと思います。

私が今まで当たり前のように思っていたことも、それを今までつくり上げてきてくれた人や、今支えてくれていてる人がいるからできていると気づ
きました。だから、これからはその人たちへの感謝の気持ちを忘れずに生活したいと思っています。また、友達を大切に、お互いに高め合って成長し
ていきたいです。

この本は、第一四九回直木賞受賞作品であり、大変名誉ある著です。しかし、私には昔から読書をする習慣がないため、最初は読む気すら起こり
ませんでした。ですが、大学の企画により、このように読書ができる機会を頂けたので、思い切って読むことにしました。

この著者は、全部で五つの短編集から構成されています。この話に出てくる登場人物は一人ひとりがあらゆる立場で活躍しているにも関わらず、
複雑な事情や心情を抱えています。それでも、「非日常」という名の「希望」を求めて今も精一杯生きていく、という姿が非常に印象的に描かれてい
ました。

私が全てのページを読み終えて最も強く思ったのは、どんなに強い人間でも、一人で生きてゆくのは不可能であり、奇跡や希望を持たずして生き
てゆくのも不可能であるということです。言葉にできないほどの辛い状況に陥っても、例え、自分が大切に想っている誰かに見捨てられそうになっ

ていたとしても、最後まで何かしらの奇跡を信じようとする、その姿勢こそ、人間が持つ素質であり、人間が人間として生きてゆけることの根本的理由なのではないか、と強く感じました。

この著書を通して、私は、今の自分を取り巻く環境や、これまでに築き上げ守り抜いてきた人間関係、そして、当たり前のように過ごしているこの日々全体をもう一度しっかり見詰め直し、より大切にしていくためにはどうすれば良いのか考える必要があるのではないかと感じました。人というのは、自分の中で当たり前だと思っているものを失うときこそ衝撃を受け、自分自身を見失い、立ち直るまでに時間がかかると私は考えています。だからこそ、この作品に描かれているような「非日常」を求め、「自分」を見い出そうとするのでしょうか。もちろん、それは決して、悪いことではありません。しかし、その「非日常」に依存をしてしまうと、現実の世界が見えなくなってしまいます。そのような危険性を考慮するならば、どんなに辛くても今ある現実を真正面から受け止め、受け入れ、自らの人生経験として残してゆく。又としての「強さ」を身につけてゆく必要があると思います。



生きるという大切さ

閉鎖病棟」 帚木蓮生著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 山本 有菜

閉鎖病棟。それは精神科病院のことを指している。閉鎖病棟と聞いて、世の中の人は何を思い浮かべるだろうか。どれだけの人が精神科病院を指しているかと理解しているのだろうか。少なくとも私は、この小説と出会うまで、閉鎖病棟という言葉も、そう呼ばれていることも知らなかった。

この小説は、その精神科病院内で起こる殺人事件の話だ。精神病患者が起こす殺人事件と書いてあり、それだけの話だと私は想像していた。しかし、それは浅い考えだった。病院に入院している患者が一人の少女を守るために引き起こした殺人だったのだ。読み終えたとき、自然と涙が出てきた。小説の登場人物たちは互いに想い合い、互いに互いを守ろうとしていて、私が想像する精神病患者の姿とは、まったく違い、驚くばかりだった。殺人を起こすような人という偏見を持っていたんだと自分自身がいかに小さかったかを思い知らされたのだ。

今まで自分の中で精神病というものに理解があるつもりだった。しかし、閉鎖病棟が精神科病院を指しているとわかったときに納得してしまった自分も、まだまだ偏見を持っていることを実感した。この小説の人物は普段耳にする精神病患者の姿とは異なり、このような病院に入る必要がない



子どもの心に寄り添う

子どもの心の育ちをエピソードで描く―自己肯定感を育てる保育のために―

鯨岡峻著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 村瀬 友里

のではないかと思うぐらいしっかりした人物もいた。精神病患者といっても症状も重度も一人一人異なるとわかり、すっかり見る目が変わった。本当は健常者と言われる私たちより、ずっとビュアで素直でまっすぐな人ばかりだと感じた。人とは違う言動をする所ばかりが切り取られてしまう辛さが全てではないけど少しわかった気がした。少しずつ理解はされてきているが、もっと堂々と生活していくためには、一人一人が理解しようとする気持ちが大切だと私は考える。

今後、精神病を抱える人に関わることは少なからず、あると思う。将来、人と接する職に就く私たちにとって「精神病」という病気を深く理解することも求められる。この小説を読んでいなかったら、自分はどんな風に接していたんだろうかと考えさせられた。

この小説を読んで、命の大切さ、人を思いやる大切さ、生きることの大切さなど自分が当たり前のようになっていることを改めて感じる事が出来た。最初は先生の推薦図書として読んだ小説だったが、私もこの小説をいろんな人に読んでもらいたいと思う。初めて言葉では表すことのできない感情を抱かせてくれ、自分の考え方が変わるきっかけとなる出会いが出来た一冊となった。

「こんな保育園、出ていったる」これは五歳の男の子の口から出た言葉である。この言葉を聞いた保育者はどれだけ心を痛めただろうか。しかし、それ以上に苦しみ、辛い思いをしていたのはこの男の子であった。

この本には、0歳から五歳までの子どもの実際にあつたエピソードが書かれており、保育者を目指す私にとって興味深いものであった。様々なエピソードから多くのことを考えさせられ、子どもの心の発達について学ぶことが出来た。私は実習で五歳児のクラスを担当したので、特に五歳児のエピソードに注目した。

冒頭で述べた、「こんな保育園、出ていったる」という言葉。これは、友だちと物の取り合いになった際に相手に手を出してしまった子どもに対して、保育者が強く怒鳴ってしまったことによるものだった。その男の子は複雑な家庭環境に置かれており、普段からクラスの中での乱暴が目立っていた。保育者は、難しい家庭事情があることを把握していたにも関わらず大きな声で叱ってしまったことを反省したそうだ。部屋を飛び出して行くところを抱き止め、話をするうちに子どもは泣き止み、落ち着いたという事例である。

実際に今の社会で厳しい家庭環境にあり、十分な愛情が与えられていない子どもは少なくない。子どもにとって保育者は心の安全基地である必要があると感じた。子どもは、自分がそうしたいと思っていなくても気持ちとは反対の行動をしてしまうことがよくあると学んだ。友だちに暴力をってしまったたり、悪い言葉を使ってしまう場面に出会った時、頭ごなしに叱るのではなく、その子どもの置かれている環境や性格を理解した上で、どうしてそのようなことをしてしまったのか推察することが求められると思った。その為に、普段から子どもの姿をよく観察することが大切だと改めて感じた。保育者は、子どもの思いを受け止める、存在を認める、存在を喜ぶという「養護の働き」によって子どもとの信頼関係を深め、愛情を与えることが出来ると思う。

五歳にもなると色々な言葉が使えるようになり、周りの大人が何気なく使った言葉を真似したり、新しく覚えた言葉を使ってみたいという思いから、あまり意味が分からないまま使ってしまうトラブルになることも多い。発達や成長の過程を理解した上で、良いことと悪いことの区別が付けられるように優しく伝えていく必要があるだろう。

たくさんさんのエピソードから子どもが成長していく姿が見られ、それを支えていく保育者という立場に改めて魅力を感じた。子どもの思いを受け止め、心に寄り添ってあげられる保育者を目指します。



ぞうじの神様」から考えさせられたこと

ディズニーぞうじの神様が教えてくれたこと 鎌田洋著

家政学部 家政経済学科 三年 竹内 佑希

この本は、著者である鎌田洋さんがディズニーランドで体験したさまざまなエピソードを元にした「物語」です。

私は地元の小さなテーマパークで清掃員のアルバイトをしています。パークのアルバイトにもアトラクションやフロントサービス、販売などのいくつかの部署に分かれており、私は中学生の頃の職場体験でトイレを含めてパーク内の巡回をしたことや、昔から学校の掃除が好きだったこともあり、自らこの部署を選択しました。しかし、周りの人は「掃除なんてよくやるね。」、本当はこの部署が良かったの？」と言われることも時々あり、掃除に対して大変というイメージがあるようです。そして、鎌田さんもやっこのことで採用されたのが、夜の掃除部隊「ナイトカストーディアル」のトレーナー兼スーパバイザーへの配属で、掃除に対する抵抗感があったそうです。また、昼間の華やかな夢の世界ではなく、沈黙の深夜のパークを掃除するとなると心から喜べないと思います。

そういう人達を変えたのが、本家アメリカのディズニーからやってきた『ウーじの神様』チャック・ボヤージというおじさんです。彼の言葉や行動が、鎌田さん達スーパーバイザーの不安感などを壊し、その言葉が後の他のカストーディアルに引き継がれて、「娘と父親との関係」や「仕事にやる気を出せない者」、清掃する娘に反対する母親」などを変えました。いろんな人の心に届くウーじの神様の言葉は魔法のように感じました。

そして、私の心にもすぐく響きました。私の地元のテーマパークは、ディズニーに比べたらかなり小さく、クオリティも低いですが、お客様が不愉快と思ってしまうようなトイレにはしたくないと思いました。また、床面にゴミが捨てられていたり、汚れがあるのは当たり前前で、少しくらいはいいかという考えがありました。そんなことを思っていた自分が恥ずかしくなりました。ウーじの神様が言った、僕たちの仕事は床を綺麗にするためだけじゃない、ゲストに夢を与え、幸せを提供することが仕事なんだ、ウーそのためには、第一にウーじが大切なんだよ。…そして何より大事なものは、チームで仕事することなんだよ。…これは、どこでも共通することだと思っています。私はパークでのアルバイトも3年目のベテランになり、アルバイトの人達に指示を出す立場にもなることがあります。この言葉を忘れないようにしたいと思いますと思っています。

規模は違って、同じようなことをしている私にとって、多くの共感・尊敬・驚きがあり、改めてディズニーのすごさも感じられる、とても興味深い本でした。



人間という生き物

羅生門

芥川龍之介著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 宮崎 絵梨奈

下人は、はぎ取った檜皮色の着物をわきに抱えて、またたく間に急なはしごを夜の底へ駆け下りた。その時、私は人間の「生きる」という事についての本能をみた。

高校生の時の事である。私はこの頃初めて「羅生門」を読み、老婆がとても印象的であった。引き取り手のない死人が捨ててあり、気味を悪がって誰もが足を踏み入れない羅生門。そのような場でありながら、「生きる」為の本能から死人の髪の毛を一本ずつ抜き取り、それを売って生きようとする老婆の姿は、私に強い印象をあたえた。

私はこの老婆の行いを正しいとは思わないが、自分ももしこのような状況になってしまったら、同じ事をしてしまいかもしれない。まして、その死人が過去悪行を働いていた者であるならば、その人達の髪を抜く事に罪悪感など湧かず、その悪人達のせいで不幸になってしまった人達の為に、



自分がかわりに復讐してあげたという優越感に浸るであろう。そして、その死人達も自分と同じように「生きる」本能の為にしていた事なのだろう。もう一人注目すべきは下人である。主人に暇を出され途方にくれていた下人。下人も初め「生きる」為に盗人になる事を選んだ。羅生門の上へ上がる火の光りがかすかに見え、そこで老婆と出会った。死人の髪の毛を抜き取る姿に一度は激しい憎悪が動き、あらゆる悪に対する反感が増した下人であったが、老婆の話聞き、下人も人間の「生きる」事への本能から老婆の着物をはぎ取った。

この本を読んで、何が良いのか悪いのか分かっていながらも、人間が生死の極限状態におかれたら、たとえ悪い事でもせざるをえないという事である。生きる為には手段を選ばないとはまさにこういう事である。これは人間の本能である為、仕方ない事であるのだろう。現代でも、社会の中で生きぬいていく為に、悪い事に手を染めていく人間は数多く存在する。いつも人間は、生きる事に必死なのである。

愛の力

きみはいい子」 中脇初枝著

文学部 児童教育学科児童教育専攻 一年 岩間 みすず

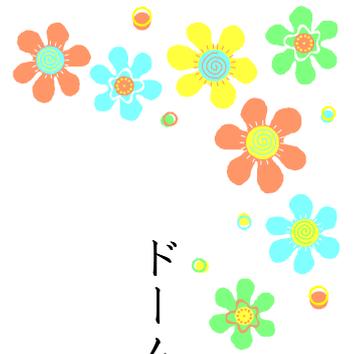
この本は、児童虐待や、身体障害者の子を持つ親、今の社会で話題になっていく教育問題をいくつかに分けたお話です。

この本は、自分がここまで何事もなく育ててもらった事への感謝する気持ち湧いてくると同時に、目を背けたくなるような悲惨な教育問題の現状が、文字から痛みを感じる程に伝わりました。

この本を読んで虐待は、自分が思っているよりもとても深刻なものだと考えるようになりました。虐待をうけて育った子どもは、自分が大人になってもその傷は癒えることなく、自分の子どもにも虐待をします。誰も手を差し伸べることがなければ絶えることはありません。ですが、虐待の道から出る一つの手段として教師という職は、その子の人生、家庭を大きく変える事ができると思います。たとえ、その子の家庭が難しかったとしても、子どもの叫びに対応してあげる、そのような子にたくさん愛情を注いであげる一人の人間になるべきだと考えました。

将来私たちが教壇に立つ頃には、もっと虐待やいじめが多くなっているかもしれないかもしれません。しかし、そのような子を逸早く見つけ、理屈や立場は関係なくその子を一人の人間として愛情の温かさや、大切さを肌で感じてほしいです。

この本は、未来をしょって立つ私たちに、現実の残酷さや厳しさを物語っています。それを覆すほどの愛と希望を与えてくれる本です。私は、まだまだこれからたくさん事を勉強しないとけません。しかし、文字ばかりと向き合うのではなく、瞳と瞳で感じ合ひながら勉強に励んでいきたいです。



ドームの中か外か

「スノードーム」 アレックス・シアラー著 石田文子訳

短期大学部 保育学科 二年 川本 莉映

この作品を読んだ時の衝撃を、私は今でもはっきりと覚えている。まるでこの世界に自分しかないような、いや、自分という存在がとても小さな、そうスノードームの中の人形のような感覚。この本と出会ったのは中学生の頃だったが、読み返すたびにこの感覚が胸に押しよせてくる。きっと、物語のもう一人の読み手であるチャーリーも、同じ感覚を味わったのだろう。そしてこの感覚を、「愛」と呼ぶのだと思う。

「愛」には様々なものがある。この本は前半部分で大人の愛憎入り混じったラブストーリーが展開され、後半では奇妙な運命で親子関係になった二人が愛を育んでいく。しかしそれも最後には偽りであったことが明かされ、まさに「愛」が「憎しみ」に変わる瞬間を読者は目の当たりにすることになる。私はこの物語の複雑な人間模様が好きでたまらない。一人ひとりの登場人物の気持ちや感情の変遷が、まさにこの「スノードーム」という本の原題である「闇の速度」を表しているように思う。闇は光へ、憎しみは愛へ、何度読んでも私がクライマックスで涙をおさえることができないのは、きっとどうしても、エックマンの気持ちになって読んでしまうからだろう。

エックマンはこの本でもっとも重要な役を担っている。なぜなら彼は世間一般でいう「悪役」の位置にいる人物だからだ。彼は外見も心も醜いキャラクターとして描かれているが、きっと誰よりも人間らしい人物だったように思う。最後まで「愛」を求め、誰よりも「愛」に飢え、そして「憎しみ」を抱えていたエックマンを、私は他人のように思えなかった。きっと誰にだってエックマンのように孤独で自己中心的な部分がある。だからこそ私は彼に共感し、彼が最後まで必死に生きようとする姿に涙してしまうのだ。

だが、エックマンは許されることはない。クリスの「だが許すことはできない」という言葉は、私の心にひどく印象づいている。数分前までエックマンのことをただ一人の家族だと言い、「愛しているよ」と泣いた少年の姿はどこにも感じられない。クリスがまさに「変わってしまった」瞬間だからこそ、私はこの場面を忘れることができない。

「さあ、どっちを選ぶ？」物語は、最後に私たち読者に問いかけてくる。私にはこの問いかけが、「この物語をどう読んだ？愛とは何かかわかった？」というように聞こえて仕方がない。実際の選択肢は二つで「スノードームに入るか、入らないか」、なのだがこれが非常に難しい。ドームの中には愛する人がいるが、二度と戻ってこれられない。こちらの世界にはなにもかもあるが、愛する人はいない。……本当に難しい問題だと思う。私も未だに答えが出せていない。愛する人がいれば、自信をもって「ドームの中」と答えることができるのだろうか。私もいつか、胸をはってこの問いかけにこたえられるようになりたいと、強く思う。



身近にできるエコ行動

それはエコまちがい？」 石田秀輝・田路和幸著

家政学部 家政経済学科 一年 市川 和子

私がこの本を選んだ理由は、単純に、読みやすそうだったからです。私は普段あまり本を読まないのですが、この本なら私にも読めそうと思います。読んでみることにしました。私はいつも本を読もうとしても、ページ数が多かったり、字が小さかったりすると途中で読むのをあきらめてしまいがちなのですが、この本はページ数も多くなく絵も描かれているので、本が苦手という人にもおすすすめです。

この本からは、自分のしていた”エコ行動“が本当に自分に合っているのかどうかを見直すこと、学ぶことができました。まず、エコ行動に自分に合う合わないがあるのかと思っていました。しかしこの本を読んでいると、無理なくエコ行動ができるんだと思うことができます。例えば、照明^{LED}に換えるというエコ行動をします。LEDに換えた安心感が生まれ、つけっぱなしにしていたら意味がなくなってしまうとこの本の中に書かれています。LEDに換えることは良いことだけど、普段の生活からこまめに電気を消していれば、それだけでエコ行動だと思いました。私も身近

なことから行動にうつしてみようと思うことができました。本文中に、”どちらが正義かということではない。どちらがいいかで考える“という一文があります。つまり、何か自分でエコ行動をしようとする時、どちらが環境にいいかではなく、どちらが自分にとって無理はないかを選ぶのが良いということだと思います。エコ行動には我慢が必要と考えがちですが、我慢をしまでエコ行動をしているのでは、良いことをしているのに気分がよくないと思います。なので、無理なくできるエコ行動をたくさんやった方が、気持ち的にも楽し良いと考えました。

この本を読んで、エコに対する目線が変わりました。やり方は一つではなく、いろんな角度から見ることが最も早くエコにつながるのではないかと思います。一人一人が自分に合ったエコな行動をすることで、環境はどんどん良くなっていくのではないかと思います。



赤毛のアン

赤毛のアン」 モンゴメリ著 村岡花子訳

家政学部 家政経済学科 二年 西垂水 法子

この本は、グリーン・ゲイブルズの家に住むマシューとマリラの老兄妹が真っ赤な髪の毛をしたそばかすだらけの孤児の女の子のアンを育てていく物語です。

本当は二人でやっている農園を手伝わせるために孤児院から男の子を引き取るつもりでした。しかし、駅に迎えに行くと、手違いで女の子であるアンが待っていました。初めは戸惑っていた二人でしたが、アンを引き取ることに決めたマシューとマリラは、アンにたくさん愛情をそそぎ、またアンは、いろいろな問題や失敗をくり返しながら成長していきます。

この本は全体を通じて、アンの成長を感じることができます。それは、アンがマシューとマリラの所に来た時、おしゃべり好きな女の子でした。アンは進学をして、マシューとマリラの元を離れ、少女としての時間が過ぎていく中でおしゃべりが少なくなっていくます。このように、アンの思春期が描かれ、また、アンを支えるマシューとマリラの老いも描かれていきます。

その中で私が心に残っている所は、アンとマシューの最後の夜の会話の文章です。なぜなら、年をとったマシューのことを気にしているアンや何人の男の子より、アン一人の方がいい、自慢の娘だと語っているマシューの姿、それぞれの家族への思いを感じることができからです。また、マシューが亡くなって、元気をなくし、年をとって目が悪くなり、これから何を生きがいにするか分からなくなっているマリラをアンは一人にしておけなく、奨学金を取り、大学に行くことが決まっていたが、進学することをあきらめ、近くの学校で教えることを選んだアンの姿を読んで、アンはとても勇気のある決断をしてかっこいいと思いました。

私はこの本を読んで、アンはマシューとマリラからの愛をたくさん受けたり、大切な人を失う悲しみを知ったりする中で、家族という大切なものを手に入れていく物語だと思えます。アンの成長とともに、いろいろな問題を乗り越え、家族や友達、周りの人との人間関係、本当の家族以上の愛情をたくさん感じることでできる作品だと思えます。私も何事にも恐れず、家族や友達、周りの人に支えてもらいながら、いろいろなことに挑戦していきたいという気持ちになりました。



大切ないのち

「いのちをいただく」 内田美智子・諸江和美著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 二年 今井 優里

大学でいのちについて学び、いのちの大切さを理解するだけでなく、今までと考え方が変わり興味をもったのでこの本を選びました。

私の家の近くにも肉屋があり、解体された牛がぶら下がっている姿を毎日見ていました。当時は命の重さよりも気持ち悪さが強く、ぶら下がっている牛のことを考えたことはありませんでした。主人公の坂本さんは食肉加工センターに勤めています。牛を殺す仕事なので私も息子のしのぶ君のように父の仕事を自信を持って他人に伝えられないと思いました。そして私自身、この仕事をしていたら牛がかわいそうで申し訳ない気持ちで、すぐに辞めてしまいかもしれません。ある日、食肉加工センターに十歳の女の子が来て、牛にお別れのあいさつをしている場面は忘れられません。小さい頃から家族のように一緒に育ってきた牛と離れなければならず、また女の子は牛が殺されることを分かっている場面は謝る姿と、離れなければならぬという辛い気持ちに共感しました。そして坂本さんが「牛のみんなを殺さないから仕事を休む」と言ったときに、息子のしのぶ君が「心の無か人がしたら牛が苦しむけん」と言う場面がとても印象的でした。確かに、牛も何も思わない人に殺されるよりは心のある人に殺された方がむくわれると思いました。また殺されるときに、牛が涙を流しているという場面、牛にも心があり人の気持ちがかかるのかなと思います。心をとれました。牛の殺し方もこの本を読んで初めて知ることができ、一瞬で殺されてしまう牛の命はとてはかないと思いました。

坂本さんのような食肉加工センターに勤めている人が仕事をしていてくれるおかげで、私たちみんなが肉を食べることができています。牛を殺してはいますがとても辛い仕事なので、感謝したいと思いました。私は好き嫌いが多く、特に肉が嫌いで残すことが多かったのですが、一つの大切な命をもらっているのに残さずに食べようと思いました。また肉に限らず野菜や魚などにも命があるので、食べることへの感謝の気持ちを大切にしようと思いました。この絵本は短く、子どもたちにも分かりやすいと思うので、子どもたちと一緒に読んで、命のとうとさを少しでも伝えられたらいいなと思いました。命の大切さを理解し、感謝の気持ちを忘れないように子どもたちに伝えていきたいです。



いのちをいただくということ

「いのちをいただく」 内田美智子・諸江和美著

文学部 児童教育学科幼児保育学専攻 一年 高瀬 夏紀

この本は、読んでいても辛い気持ちになるものでした。読み進めるのが苦しくなって、何度か読むのを中断しました。しかし、生きていく上で、保育者を目指す上で、向き合わなくてはならないテーマだと思っています。

最初のページの 坂本さんは、食肉加工センターに勤めています。牛を殺してお肉にする仕事です。」という二文は、とてもインパクトがあって、出だしから心臓をギュッと握られた感じがしました。この本の中では、「殺す」という表現が何度も出てきます。残酷で生々しいと感じるかもしれませんが、この言葉に変わる表現は無いと思います。美化されたオブラートに包んだ表現をせずに、「殺す」という単語をあえて使うことで、私たちは毎日毎日たくさんの命を奪って生きているという事実を、強く突きつけられているように思いました。

特に印象的だったのは、みいちゃんという牛と、みいちゃんを飼っていた家族のエピソードです。お肉になったみいちゃんを、女の子が泣きながら食べるところは思わず読むのをやめてしまいました。お皿にのせられたみいちゃんを見て、少女はいったい何を思ったのでしょうか。そう考えると涙が止まりません。あまりに残酷です。しかし、同じことを私たちは毎日繰り返し返しているのです。みいちゃんだけで無く、私たちが口にしている牛たちも、お肉にされる前までは元気に生きていたのです。牛に限らず、豚だって、魚だって同じことです。

「いただきます」という言葉は、ごはんを作ってくれた人に対する感謝と、「命」をいただくことへの感謝の気持ちだということ、誰もが教わると思います。しかし、思いかえしてみてください。「いただきます」はただの形式的なものになっていませんか。私たちは「命」をいただいて生きているということ、今一度自覚しなおすべきです。この本に出会えて本当に良かったです。たくさんの人に読んでもらいたい一冊です。



学校の社会

桐島、部活やめるってよ」 朝井リョウ著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 一年 塩澤 まりな

僕らは気づかない振りをするのが得意だ」この言葉は冴えない映画部の前田涼也が心でささやいた言葉だ。私はこの言葉に非常に共感した。周りの評価を気にして、人の前で自分を演じてしまえば本当の姿を出せない。周りに流されて、自分の進むべき方向、選択肢へ進めれない。これらは思春期ならではの誰もががきっと経験したことのある気持ちであるだろう。私はこの言葉を受けて、複雑に揺れ動く感情がフラッシュバックしたような感覚になった。

この作品は嫌になるほどスクールカーストが生々しく描かれている。スクールカーストとは、著者である朝井リョウさんの言葉を借りると、目立つ人と目立たない人で分けられる残酷なものである。この残酷なスクールカーストは、たとえ仲の良い学級であろうと存在してしまうものだと思ってしまう。

自分が傷つきそうなことには近づかない。もう一度、自分の立ち位置を再確認するようなことはしない」と述べる前田涼也には正直同情した。私はさすがにここまでの気持ちを持ったことはない。ただ逃げているだけのじゃないか、と思ってしまう。この時点でカーストの差がはっきりわかる。この差がどこにでもある学校の怖いところを覗いているような感じがした。

ピンクが似合う女の子って、きっと、勝っている。すでに、何かに「吹奏楽部の目立つわけでも目立たないわけでもない沢島亜也がささやいた。これは女の子が思うであろう、可愛いと思われたい「嫉妬」という気持ちから来るもので、私も実際に思ったりしたことがある。この世代だけでなく、人間という生き物は自分と他人を比べたり、他人より上に立ちたいなど思ったりする。その面では世代、性格関係なく共感できる場面だと思っただ。

自分が高校時代どんな子だったか、高校時代の未熟さ、人間社会と学校社会の人間を抑圧する力をあらためて考えさせられる作品だった。



ペンギンと夢

『ペンギンと泳ぐ旅 南極エコツアーリズム』 西森有里著

文学部 児童教育学科児童教育学専攻 四年 田村 静香

あなたの一番好きな動物は、何ですか。私の一番好きな動物は、ペンギンです。空を飛ぶことができない鳥。陸の上では、可愛らしく歩きますが、海を泳ぐ姿は空を自由に飛ぶ鳥を思わせる迫力がありません。このギャップが好きな理由の一つです。

そんなペンギンと泳いでみたいと思い、見事に行き着いた人の体験談があります。『ペンギンと泳ぐ旅―南極エコツアーリズム』という本に綴られています。作者は、写真家になる夢を三十代になっても追いつけず、南極でペンギンと泳ぐ」という夢を実現しました。

私は、作者が周りの人に夢を否定されても、叶えるための準備を続けていた点に感動しました。夢を夢のまま終わらせないように、自分にできることを精一杯行っていたからこそ、作者は夢を達成できたのだと思います。

私にも、ずっと追いかけている夢があります。それは、小学校の先生になることです。もう少し広い夢は、子どもの教育に携わり、子どもの未来をよりよくできる人になることです。今年私は教員採用試験を受けました。しかし、結果は不合格で夢が遠くに行ってしまったような気持ちになりました。読書が好きなのは、気晴らしとして図書館に足を運びました。そのとき、出会った本が夢を叶えた写真家の本だったので。

題名に惹かれて手に取った本の文章は、落ち込んでいた私の心に、響きました。実際に南極に行き、本を出すことを待ちこがれていた作者の文章は、わかりやすく「伝えたい」という強い熱意を感じました。

読んでいて、私も教員になった子ども達に伝えたいことがたくさんあることに気づかされました。私が教師になったら、何かに夢中になることはとてもすてきなことであることを伝え、そういったものを子ども達が見つけられるようにしたいです。

今回こうして感想文を書いた本は、ペンギンが好きの人が読むと楽しめます。また、写真家になりたい人、南極に行きみたい人にもオススメです。それにつけ加えて、夢を一生懸命追いかけている人や追いかけた人、夢を探している途中の人にも、ぜひ読んでほしいです。

夢を実現できたときの気持ちは、海の中を自由に泳ぐように気持ちのいいことなのかもしれません。今は、陸を歩くペンギンのようにできることを少しずつ進めていきたいです。



女の強さ

「リットルの涙」 木藤亜也著

家政学部 生活環境学科 一年 笹木 瑞穂

私がこの本を知ったきっかけというのは、この『リットルの涙』のドラマを見たからです。このドラマを見て私はとても衝撃を受けました。また、ドラマの中で亜也のお家はお豆腐屋さんでした。私の家もお豆腐屋さんなのでとても親近感がわいたことを覚えています。なので原作を読んでもよいと思いました。

読んでみると、ドラマと違うところがいくつかありました。しかし、これが本当のことなのだと思います。ドラマの中でも、とても亜也さんという女性はとても強い女性であったんだと感じました。しかし、この本を読んでみて負けず嫌いでとても強い人だったのだとドラマのときよりも感じました。この本の中で亜也さんが弱音をはいているところがなかったということが私の中でとても印象的です。また、いつも出来ないことに對して悲しがるのではなく悔しがっていたという所もとても印象的です。私はあまり悔しいと思うタイプではありません。いつもあきらめが早いタイプの人間です。なので亜也さんという女性には私にとってとてもすごい人だと思います。また、私が読んでいて『容大病院』であったり、『明和高校』という名前が出て来ていて自分の地域にある物だったということもあり私にとって親近感を感じるものでした。また、親近感を感じる一方ですぐ近くでこのようなストーリーがあったということは私にとっても衝撃でした。

私はドラマの中で亜也が言った「どうして病気は私を選んだの。」というセリフがとても印象的でした。このセリフに涙を流した人はいっぱいだと思います。私はこのドラマの原作であるこの本を読んでみてもこのセリフというのは印象的に残るだろうと思っています。しかし、このセリフではなく亜也さんのお母さんの言ったセリフがとても私は心に残りました。それは「好きで病気になったんじゃない。体が不自由でも残されたものはたくさんある。もし、亜也が考える能力もない人間だったら、病気になって初めて知った人の温かき、優しさに触れることはできなかったんよ。」というものです。自分の娘が病気になったというとき、早く元気になるように、頑張りなど言ってしまうだろうが、娘の病気を受け止め、娘を支える母の強さが私にとって印象的です。自分に娘が出来、同じ立場になったとき、亜也さんのお母さんのような行動がとれるとは思いません。なので、亜也さんのお母さんも強い女性であったのだと感じます。この本を読み、これから一人の女性になり、いずれ母親になると考えたとき、亜也さんや亜也さんのお母さんのように強い女性になりたいと思いました。

平成 26 年度読書感想文コンクール実施要綱

■ 募集内容

- ・ 1冊本を選び、読書感想文を書いてください。
- ・ 応募は未発表の原稿で、1人につき1作品に限ります。
- ・ 字数は原稿用紙2～3枚程度とします。

■ 応募資格

名古屋女子大学 学部生 短期大学部生

■ 応募期間

平成 26 年 8 月 1 日～10 月末日

■ 審査員 （五十音順、敬称略）

石毛恵美枝，宇野民幸，小町谷寿子，羽澄直子，
藤田桂子，間瀬清美



平成 26 年度 読書感想文コンクール 読書感想文作品集

平成 27 年 1 月発行

名古屋女子大学 図書館
〒467-8610 名古屋市瑞穂区汐路町 3-40